

第五章 薫君の物語 人びとの昇進後の物語

[第一段 薫、玉鬘邸に昇進の挨拶に参上]

*左大臣亡せたまひて(左大臣が亡くなって)、*右は左に(源右大臣が左大臣に)、*藤大納言(藤大納言が)、左大将かけたまへる右大臣になりたまふ(左大将兼右大臣に昇進なさいます)。 *「左大臣」は上文の注にくこの左大臣は系図不詳。竹河左大臣。夕霧右大臣の上位者。>(四章七段)とあった人物で、やはりこのような重鎮を「系図不詳」で片付けるのは物足りない。といて、私に何が分かる筈もないので、専門家にはこういう所にこそ可能性や大枠だけでも考察の一端を示してもらいたい。そうでないと当時の読者ならぬ私には人事の重さや人物の立体像が全く掴めず、有力家の人びとが昇進したという筋しか見えてこない。 *「右は左に」は注にく夕霧は右大臣から左大臣に。『集成』は「ただし、後の宇治十帖を通じて、夕霧は右大臣のままである」と注す。>とある。 *「藤大納言」は注にく紅梅大納言は左大将兼右大臣に。『集成』は「ただしこの人、後の宿木、東屋の巻には、按察使の大納言のままである」。『完訳』は「右の昇進人事のうち、夕霧左大臣と紅梅の右大臣は宇治十帖での官と符合しない」と注す。>とある。この帖は数年に渡っての粗筋みたいな話が、年次を明示しないままに語られていて、全体の構成把握に手間取っているが、年立ては匂宮巻二章一段の「十四にて、二月に侍従になりたまふ。秋、右近中将になりて」と薫君の年齢が明示された記事と、更に匂宮巻二章五段に「十九になりたまふ年、三位の宰相にて、なほ中将も離れず」とあった事を頼りに、当巻一章四段の「四位侍従、そのころ十四、五ばかりにて」とあったことと摺り合わせて、その後の話の内容から年次を推量しているワケだが、その薫君の位階と年齢を基準にした構成把握とも、此処の昇進記事は合致しない、という事のように混迷は深まる。

次々の人びとなり上がりて(それ以下の人々も次々と昇進なさって)、*この薫中将は、中納言に(今さっき薫ることで評判だと言った宰相中将は中納言に)、三位の君は、宰相になりて(三位中将となっていた源大臣家の若君は宰相中将になって)、喜びしたまへる人びと(昇進を喜びなされた人々は)、この御族より他に人なきころほひになむありける(この源氏御一族以外には誰も居ないといった当節事情のようです)。 *「この薫中将は」は注にく宰相中将の薫は中納言に。『集成』は「紅梅に「源中納言」とあり、椎本に中納言昇進のことが見える」と注す。>とある。椎本巻は未読だが、二章一段に「宰相中将、その秋、中納言になりたまひぬ。」とあるようで、私には今のところ根拠は不明だが、それが薫君 23 歳の年のことと知られているらしく、であれば、此処の記事も薫君 23 歳の秋のこと、かと思われる。私は前段での話を薫君の 21~22 歳くらいのことと踏んでいたの、話の流れにこの年立ては、ほぼ符合する。で、薫君を 23 歳と見立てた時の他の登場人物の年齢をざっと見れば、玉鬘殿 56 歳、冷泉院 52 歳、源殿 49 歳、藤殿 54 歳、今上帝 44 歳、春宮 30 歳、といったところ。源参議中将は未だに年齢不詳だ。ところで、この人事が左大臣の死去に伴うものだとすると、既に辻褃の合わないことになっている。紅梅巻では薫君は「源中納言」(一章四段、二章四段)と呼称されていたが、源殿は「右大臣」、藤殿は「大納言」、とそれぞれ呼称されていて、此処の既述に符合しない。紅梅巻本文には登場人物の年齢明示がなく、且つ匂宮巻との話題連続性も無く、むしろ薫君が「源中納言」と呼称されていることから、薫君 24 歳の春の紅梅時期の話題、とはいえ紅梅巻は専ら大納言家の話題で薫君は殆んど登場しないが、と見做されているようだ。が、私には、そも紅梅巻が 43 巻に収められている巻立てが全く理解できない。何かの話題に沿って年次で話を進めて、別の話題に移った時に時間を遡る、という話の仕方は事物事象の比較考察の方法としてある、かと思うが、話題の連続性も無しに時間が飛んで、かと思うと、また急に時間が戻って視点を変えた話が始まる、という巻立ては無駄に面倒だ。実際、紅梅巻は当巻を読んだ後で、必ず読み直さなければ紅梅巻自体の話の意味も分からないし、であれば、全体の構想構成も分からず、従って余巻も読めない。しかも、紅梅巻の話は何処から何処へ繋がるかもまだ見えないので、再々度読み直さなければならぬのかも知れない。

中納言の御喜びに(薫君は中納言昇進の挨拶回りで)、前の尚侍の君に参りたまへり(玉鬘邸に参上なさいました)。御前の庭にて拝したてまつりたまふ(寝殿南表の階段下で拝礼申し上げなさいます)。尚侍の君*対面したまひて(玉鬘殿は御簾内から対面なさって)、*「たいめん」は顔を合わすような言い方だが、内実はくある程度の威儀を以て直に応答する>ことを示すようで、男同士で身分も同等なら実際に顔を合わすかも知れないが、多くの場合は御簾か几帳か衝立などで直答はするが対面はしない、ということだったのである。

「かく、いと草深くなりゆく葎の門を(このようにとても草深くなってゆく廃れた家を)、よきたまはぬ御心ばへにも(避けなさることなくお寄り下さるお気遣いにも)、まづ*昔の御こと思ひ出でられてなむ(あなたとの姉弟の御縁となる六条院が私を御養い下さった御恩が思い出されます)」*「むかしのおおんこと」は注に<『完訳』は「源氏生前の昔。源氏が自分を養女にしたから、薫も親しむ」と注す。>とある。「まづ」は主たる理由を述べる時の前置副詞で、何に付いての理由付けかと言えば、玉鬘と薫君がこうして近しく出来ている<義理の姉弟である縁>に付いてだ。

など聞こえたまふ、御声(などと申しなさる御声は)、あてに愛敬づき(上品で世慣れた社交性があり)、聞かまほしう今めきたり(聞き心地が良く華やいでいました)。「古りがたくもおはするかな(老け込まずにいらっしゃることだ)。かかれば、院の上は、怨みたまふ御心絶えぬぞかし(これだから冷泉院は惜しみなさる御気持が消えないのだろう)。今つひに(今にきつと)、*ことひき出でたまひてむ(間違いを引き起こしなさるだろう)」と思ふ(と薫君は思います)。*「ことひき出でたまひてむ」は<冷泉院がただならぬコトを引き起こすだろう>だろうが、今さら院に何が出来ると想定しているのか私には全く思い付かないので、言い換えに困る。が、現代語でも「コトを起こす」と言えば<問題のある事をする>だから、「こと」は<間違い>と言って置く。因みに冷泉院 52 歳、玉鬘殿 56 歳、の筈だ。

「*喜びなどは(昇進の喜びなどは)、心にはいとしも思うたまへねども(生活自体は変わりませんので、私自身は特に感じませんが)、まづ御覽ぜられにこそ参りはべれ(お役に立てる事がございましたらと、先ずはご挨拶に参りましてございます)。よきぬなどのたまはするは(避けずになどと仰るのは)、おろかなる罪にうちかへさせたまふにや(此方への日頃のご挨拶を疎かにしている罪に打ち返しなさっての仰せでしょうか)」と申したまふ(と源中納言は謙遜して応え申しなさいます)。*「喜びなどは」の文は字面を追うだけでは真意が掴み難い。私なりの解釈で補語したが、もっと別の意味があるのかも知れない。ただ普通は、昇進のお披露目とは、地位利用の便宜供与、とは即ち口利き依頼についての適用範囲の説明と受付案内を意味する。

「今日は(今日のようなお祝いの日)、さだすぎにたる身の愁へなど(衰えた老人の悩み事など)、聞こゆべきついでにもあらずと(お聞かせ申すべき場合では無いと)、つつみはべれど(気が引けますが)、わざと立ち寄りたまはむことは難きを(ご相談申し上げるために、わざわざお立ち寄り頂くわけにも行きませんし)、対面なくて(直にお話ししないと)、はた(それはそれで)、さすがにくだしきことになむ(何とも混み入ったことですので、お聞き頂きたいのです)。

院にさぶらはるるが(院に侍しておられる姉君が)、いといたう世の中を思ひ乱れ(もうとても宮仕えを思い悩み)、中空なるやうにただよふを(身の置き所もなく漂い暮らすのを)、女御を頼みきこえ(女御の御理解をお頼み申し)、また後の宮の御方にも(また後の斎中宮様にも)、さりと

も思し許されなむと(院の御寵愛を大目に見て頂けるだろうと)、思ひたまへ過ぐすに(思い申して過ごしていたのに)、いづ方にも(どちら様にも)、なめげに心ゆかぬものに思されたなれば(御息所を無礼で気に障る者にお思いになったようなので)、いとかたはらいたくて(とても居た堪れず)、宮たちはさてさぶらひたまふ(御子たちは院にいらっしゃいますが)、この、いと交じらひにくげなるみづからは(このまるで仲間はずれのような本人は)、かくて心やすくだにながめ過ぐいたまへとて(当家に戻って心穏やかにしてお休みなさるようと)、まかでさせたるを(帰らせたのですが)、それにつけても(そのことについて)、聞きにくくなむ(責められまして)。

上にもよろしからず思しのたまはすなる(冷泉院におかれても御息所の里帰りをご不満に思い仰っているようです)。ついであらば(機会があれば)、ほのめかし奏したまへ(御息所の辛い立場をそれとなく院にお口添え下さい)。とごまかうざまに(どちらの御方様にも)、頼もしく思ひたまへて(頼りに思い申し上げまして)、出だし立てはべりしほどは(出仕いたした当初は)、いづ方をも心やすく(どなた様をも親切だと)、うちとけ頼みきこえしかど(近しく信頼申しておりましたが)、今は、かかること誤りに(今はこうした行き違いに)、幼う*おほけなかりけるみづからの心を(未熟で身の程知らずの自分の判断を)、もどかしくなむ(悔やんでいます)」 *「おほけなし」はく身の程を弁えない。畏れ多い。>と古語辞典にある。注には此処の文意について<後見もなく娘を院に参院させ、このような事態が起こることを見通せなかった、幼稚で身分不相応な我が身であったと後悔。>とある

と(と玉鬘殿は)、うち泣いたまふ*けしきなり(泣いていらっしゃるようでした)。 *「けしきなり」は注に<『完訳』は「簾越しに感取される」と注す。断定助動詞「なり」は登場人物薫と語り手の判断が一体化した表現。>とある。

[第二段 薫、玉鬘と対面しての感想]

「さらにかうまで思すまじきことになむ(何もそう悩みなさるまでもない事でしょう)。かかる御交じらひのやすからぬことは(そうした宮仕えの気まずさは)、昔より、さることとなりはべりにけるを(昔からそんなものと決まっていますが)、位を去りて、静かにおはしまし(院は退下なさって静かに暮らしていらっしゃって)、何ごともげざやかならぬ御ありさまとなりたるに(何事も表立った派手な御儀式はありませんので)、誰れもうちとけたまへるやうなれど(誰もが仲良くしていらっしゃるようでも)、おのおのうちは(各自内心では)、いかがいどましくも思すこともなからむ(どうして院の歓心を引こうと張り合いなさる気持もないものでしょうか)。

人は何の咎と見ぬことも(人が悪く思わない事でも)、わが御身にとりては恨めしくなむ(子を儲け損なった御方様自身にとっては、その宿命が嘆かわしく)、あいなきことに心動かいたまふこと(羨望が嫉妬に変わりなさるといのは)、女御、後の常の御癖なるべし(女御や後のいつもの御心向きなのでしょう)。さばかりの紛れもあらしものとしてやは、思し立ちけむ(そればかりの面倒も無いものと思って参院をお決めになったのですか)。ただなだらかにもてなして(これくらいの仲違いなど、ただ動ぜずに構えて)、ご覧じ過ぐすべきことにはべるなり(遣り過ぎしなさに限ります)。*男の方にて(男の私から)、奏すべきことにもはべらぬことになむ(お話し申し上げるべきことではないでしょう)」 *「をとこのかた」は<男の方の問題>という言い方だが、此処で言う「男」は「女」に対して<異質なもの>という意味ではなく、実は広い意味で<立場が違う者=他人>のこと、かと思

う。こういう人間関係の問題は「をんなのかた」として考えれば解決するのか、と言え、気持の問題なので本人以外には誰であろうと、そも関われない。ただ、男女間の気持の問題なので、昇進の挨拶に来た<男>の気の利いた返事として「をとこ」と言ったワケだ。勿論、理屈としては後宮という制度の中で起こっている事柄だから、その制度の是非については男も女も関係が有るワケだが、今は制度の問題じゃない。というワケで、注にく『完訳』は「後宮の女たちの葛藤は、公的立場の男子官僚には関わらぬこととして、玉鬘の懇願を冷たく突き放す。薫らしい冷静な反応に注意」と注す。>とある見方には同意出来ない。男の問題＝表向きの問題＝政治問題、という語用は確かに作者に意識されているとは思いますが、それは政治問題を扱う納言の地位に昇進したことを報告に来た薫君が、この場面ならでは洒落になると気付いて使った「男の方」という語、という扱いであって、と言ってもこの語用は一般化しやすいので洒落になる場面は多そうだが、真意は<男の問題>ではなく「人の上」だ。などと、くどくどしく能書きを垂れるのも、この場面は「薫らしい冷静な反応」を示す眼目ではなく、玉鬘殿と薫君の愚痴を言い合える、その心持ちが分かり合えるような、練れた関係性を示す意図で書かれている、と思えるからで、もう少し言えば、玉鬘は薫の成長ぶりを確かめようと鎌を掛けたのであり、かつて「まめ人」(二章二段)と揶揄された薫にしてみれば色男の面目を施そうと訳知り顔をしてみせた、という趣き的一幕なのだろう。

と(と源中納言が)、いと*すくすくしう申したまへば(理屈っぽく応え申しなさると)、 *「すくすくし」は<愛嬌が無い、素っ気無い>と古語辞典にあり、真面目というより堅苦しい如何にも役人然とした事務的な対応で、是も司の権限が増した役職昇進に掛けた洒落だ。

「対面のついでに愁へきこえむと(お会いする機会があれば聞いて頂こうと)、待ちつけたてまつりたるかひなく(お待ち申し上げていた成果も無く)、あはの御ことわりや(何て素っ気無い御結論なんでしょう)」と、うち笑ひておはする(と玉鬘殿は笑っていらっしゃいます)。

人の親にて(親らしく)、はかばかしがりたまへる*ほどよりは(地道に問題解決を図ろうとなさる姿勢と言うよりは)、いと若やかに*おほどいたる心地す(玉鬘殿はとても若々しく寛いでいる感じです)。 *「ほどよりは」は<～の割には>という反意の副詞語用ではなく、<～の状態と言うよりは>という別意の比較参照値提示、と読んで置く。 *「おほどいたる」は「おほどきたる」のイ音便。「おほどく」は<おっとりしている。うちくつろぐ。>と古語辞典にある。

「御息所も、かやうにぞおはすべかめる(御息所もこんな風でいらっしゃるのだろう)。*宇治の姫君の心とまりておぼゆるも(宇治の姫君が気になっているのも)、かうざまなるけはひのをかきぞかし(こういう風情が楽しそうに思えるからだなあ)」と思ひゐたまへり(と御簾前の縁側で思っただけです)。 *「宇治の姫君」は注にく宇治八の宮の大君をさす。『完訳』は「紅梅巻末「八の宮の姫君」と同じく、やや唐突。構想・成立上の問題点とされる。女君たちを次々と連想する点が、薫らしい」と注す。>とある。「女君たちを次々と連想する点が、薫らしい」は面白い指摘で留意して置きたい。さて、この物語に於いて話の唐突さは、光君物語でも既に何度か出くわしてきた。逸文もあるかも知れないし、加筆もあるかも知れないし、巻立ても正しい原型で伝わっている保証などなく、全ては現存資料からの妥当性で「伝・源氏物語」を読む他は無いのだから、何処まで行っても読者は受身だが、それにしても確かにこの物語には、何て言うか、変な違和感、不統一感はずっと付きまとはいる。誰かの基本構想、または焦点を当てた実相、などの話の軸を基に、担当を決めて分業体制で書き上げたのだろうか。仮に一人の大作家が本当に全編を一人で数年がかりで書き上げたとして、印刷のない時代に複製は全て写本であり、分業とは別に複数者による複数の複製本が作られることは必然だ。厳正に管理される公文書でもない物語は大作であるほど異本が生じ易い。不統一は必然かも知れない。

専門家でも答えの無い問題に私が答えられる筈もない。が、それでも紅梅巻の巻立ての異様さを見ると、相当な年月を掛けて研究されて来たであろうに、この未整理状態には少なからず私をして専門家に不満を覚えさせる。「構想・成立上の問題点」は原本が無い以上は必ず不明の部分が残るだろうが、物語構成は現存資料を付き合わせれば一定の整理は着く筈なので、その大筋までをいつまでも懸案にして置いて欲しくない。

*尚侍も(尚侍の次女も)、このころまかでたまへり(この時に実家に帰って来ていらっしやいました)。*こなたかなた住みたまへるけはひをかしう(寝殿の東西の部屋に長女と次女が参院や参内以前同様に住んでいらっしやる女房などが大勢いる雰囲気で華やいでいて)、おほかたのどやかに(全体に穏やかで)、紛るることなき御ありさまどもの(腰が座った落ち着いた御二方のご様子が)、簾の内、*心恥づかしうおぼゆれば(御簾の内側に気恥ずかしく感じられて)、心づかひせられて(源中納言は姫君たちを意識して)、いとどもてしづめめやすきを(いっそう居ずまいを正して立派なので)、大上は(玉鬘殿は)、「*近うも見ましかば(この君を婿に迎えて、地殻で御世話申していたなら)」と、うち思しけり(と内心でお思いになったのです)。*「尚侍(ないしのかみ)」は注にく中君。>とある。玉鬘殿を「かんのきみ」と呼んで、次女を「ないしのかみ」と呼ぶ不自然さは作者にもあるらしく、此処では下に玉鬘殿を「大上(おほうへ)」としてある。だったら「大上」で通せば良さそうだが、そうはしない。良く分からない。*「こなたかなた住みたまへるけはひ」は注にく寝殿の東西の部屋に。参院・参内以前にも同様に住んでいた。>とある。「けはひ」は女房が大勢いる華やぎだろうか。左様明示補語する。*「心恥づかしうおぼゆれば〜いとどもてしづめめやすきを」は注にく主語は薫。>とある。因みに、源中納言 23 歳、御息所 24 歳、尚侍 23 歳、玉鬘殿 56 歳、といったところ。*「近うも見ましかば」は注にく「ましかば」反実仮想。薫を婿として世話するのだったらと思う。>とある。

[第三段 右大臣家の大饗]

大臣の殿は(藤右大臣の邸宅は)、ただこの殿の東なりけり(ちょうどこの玉鬘邸の東隣なのでした)。「おとど」は<藤右大臣>のことらしい。下文を読み進めば、この「大臣」が藤右大臣である事は文意から知れるが、「右の大臣」と言わずに「大臣」とだけ言って、それが「右大臣」だと当時の読者が分かる、ということは如何いう事なのか。藤殿は大納言から大臣に新任されたので、「大臣の」と言えば<新しく大臣になった>みたいに聞こえたのだろうか。当時の読者が、それも語りで聞いたなら、そういう感覚もあったのかもしれないが、文字上でそう解釈するのは難しい。また、一章四段に「この殿は、かの三条の宮といと近きほどなれば」と玉鬘邸が朱雀院の女三の宮邸に近いということは語られていたが、その直ぐ後の二章一段に「睦月の朔日ころ、尚侍の君の御兄弟の大納言、高砂謡ひしよ、藤中納言、故大殿の太郎、真木柱の一つ腹など、参りたまへり」と藤殿が語られたときにも、藤殿邸が玉鬘邸の東隣だとは言及されていなかったのも、是は物語上の設定というよりは、実相に基づく当時の読者の認識を前提にした言い方のように思えてならない。が、何れ私にはとても変な言い方なのだが、「おとどのとはただこのとのひんがしなりけり」は妙に懐かしい響きのある呪文にも聞こえる。

大饗の垣下の君達など(大臣就任披露宴に列席者として招かれた貴公子たちなどが)、あまた集ひたまふ(藤原邸に多数参集していらっしやいます)。「大饗(だいきやう)」は一般名詞として<大宴会>を意味するが、当時「大饗」と言えば<二宮大饗(にぐうのだいきやう)と大臣大饗(だいじんのだいきやう)>を示す固有名詞だったらしい。ウィキペディアに比較的詳しく説明があって、以下抜粋参照する。即ち、「二宮大饗は、毎年正月 2 日に親王・公卿以下近臣などが、中宮(皇后)及び東宮(皇太子)に拝謁して饗宴を受ける儀式である。」とあり、「大臣饗宴には大きく分けて、任大臣大饗と正月大饗がある。前者は大臣に任命された際に就任儀

式の一環として行われ、後者は毎年正月の1日を用いて行われる。古くは左大臣が4日、右大臣が5日に開くとされていたが、後には1月中下旬にずれ込む場合や大臣就任の翌年のみ開く場合もあった。」とのこと。ウィキには更に詳しい記述があったが、要するに此处で語られている「大饗」は臨時の〈大臣就任披露宴〉であって、大臣が自宅に要人を招いて接待するのだが、その様式も準公式に定まっていた格式ある、とは言っても堅苦しく儀式ばったものではない祝宴会だったらしい。「垣下」は「ゑが」と読みがあり「ゑんが」「かいもと」とも言われる〈平安時代、朝廷や公卿などの恒例・臨時の行事の供応の席に伺候した、正客以外の相伴の人。〉(大辞泉)とあり、ざっと〈一般招待客=列席者〉のことらしい。

*兵部卿宮、*左の大臣殿の賭弓の還立、*相撲の饗応などには、*おはしまししを思ひて(匂う兵部卿宮が一月の賭弓の還立や七月の相撲の饗応などには参列なさっていらした姿を思い浮かべて)、今日の光と請じたてまつりたまひけれど(藤右大臣は今日の主賓として御招き申し上げなさっていたが)、おはしまさず(出席なさいませんでした)。*「兵部卿宮」は〈匂宮〉だが、当巻に於いては此处で初めて触れられる。*「左の大臣殿の賭弓の還立(ひだりのおとどどののりゆみのかへりだち)」は注に〈「賭弓の還立」は匂宮巻の「賭弓の帰饗」をさす。〉とある。が、だとすると〈匂宮巻の「賭弓の帰饗」〉は薫君が22~23歳の宰相中將で、源殿が右大臣だった最後の年の話ということになりそうで、それならそれで良いが、匂宮巻の賭弓は薫君の20歳のことと読んでいたので、また少し混乱する。賭弓は例年行事だろうから、此处で言う「賭弓」は匂宮巻の賭弓よりは後年の可能性もありそうだが、だとしたら、匂宮巻で賭弓の帰饗を話題にした唐突感も気になるので、やはり是は〈匂宮巻の「賭弓の帰饗」〉と読むべきだろうか。*「相撲の饗応(すまひのあるじ)」は注に〈七月の相撲の節会に催される。〉とある。「相撲の節(すまひのせち)」は〈奈良・平安時代、毎年7月に天皇が相撲を観覧し、そのあとで宴を催す年中行事。二六日仁寿殿(じじゅうでん)で下稽古(げいこ)の内取りがあり、二八日紫宸殿(ししんでん)で召し合わせが行われ、そこで選抜された者が翌二九日に「抜き出」という決勝戦を行った。相撲の節会(せちえ)。相撲の会(え)。〉と大辞林にある。饗宴まで含んでの行事らしい。*「おはしまししを思ひて、今日の光と請じたてまつりたまひけれど」はいよいよ以て、「左の大臣殿の賭弓の還立」がこの年の一月行事、「相撲の饗応」がこの年の七月行事で、この「大饗」がこの年の秋(昇進人事が秋なのは椎本巻から知れる)の行事だったことを示す言い方に見える。ほぼ決まりだ。匂宮巻の「賭弓の帰饗」は薫君23歳の時の話だ。匂宮巻も左様に見直して置く。尤も、賭弓と相撲は御所の年中行事で、この大饗は臨時の私宴なのだが、藤原氏の大饗はそれほどの格式があったのだろう。また、「おはしましし」は〈出席なさっていたこと〉ではなく〈出席なさっていた時の様子〉という臨席感のある言い方。

心にくくもてかしづきたまふ*姫君たちを(大事に御世話申しなさっている姫君たちを)、さるは(いよいよ以て)、心ざしことに(匂宮に的を絞って)、いかで(どうか婿に迎えたい)、と思ひきこえたまふべかめれど(と藤殿は思い申し上げなさっていらっしゃるようだが)、宮ぞ、*いかなるにかあらむ(宮の方はどういうわけか)、御心もとめたまはざりける(この藤原家の姫君たちに興味をお持ちでいらっしゃいませんでした)。*「姫君たち」は注に〈紅梅右大臣が大切に育てている姫君たち。中君と宮の御方。大君は春宮に入内。宮の御方は後の北の方真木柱の連れ子、螢兵部卿宮との間の子。〉とある。が、この注の内容は紅梅巻に記されていた事情であって、この竹河巻を紅梅巻を踏まえて読むことには大きな疑義があるし、時系列で見ても、此处の語り時点で紅梅巻の記事に先行しているので、この注は敢えて無視して置く。注に対してこのようなノートをする事自体、さすがに想定外だった。*「いかなるにかあらむ」も紅梅巻に拠れば、匂宮は連れ子姫に気があって、藤殿は中君と縁組させたがっていて、連れ子との縁組は真木柱奥方が断つて来た、という匂宮にとって敬遠すべき事情が語られていたが、この場面に於いては、読者にはまだ事情が知らされ

ておらず、作者が読者に興味を引かせる意図で書かれた文のように思える。言ってみれば、紅梅巻が先にある巻立てで、読者の興味が削がれた、みたいな格好だ。

源中納言の、いとどあらまほしうねびととのひ(源中納言がますます立派に成長して)、何ごとも後れたる方なくものしたまふを(何事も人に引けを取ること無くいらっしゃるのを)、*大臣も北の方も(藤殿も奥方も)、目とどめたまひけり(目に留めなさいました)。 *「おとどもきたのかたも」は注に<紅梅右大臣と北の方真木柱。>とある。が、真木柱の再婚も紅梅巻で語られていて、今現在は無視すべき事項なので、此处では「北の方=奥方」とだけ読んで置く。

隣のかくののしりて(隣がこのように活気があって)、行き違ふ車の音(行き違う牛車の音や)、先駆追ふ声々も(先払いをする従者の声などにも)、昔のこと思ひ出でられて(昔の権勢家だった頃の事が思い出されて)、この殿には(この玉鬘邸にあっては)、ものあはれにながめたまふ(しみじみと感じ入っていらっしゃいます)。

「*故宮亡せたまひて(前兵部卿宮が亡くなって)、ほどもなく(そう時を置かずに)、この大臣の通ひたまひしほどを(この藤殿が真木柱未亡人目当てに通いなされた事を)、いと*あはつけいやうに(とても軽薄な所業のように)、世人はもどくなりしかど(世人はあげつらっていたが)、かくてもものしたまふも(やがて後妻に納まって、このように夫婦仲良くいらっしゃるのも)、*さすがる方にめやすかりけり(何はともあれ結構なことだ)。 *「故宮亡せたまひて」は注に<以下「いづれにかよるべき」まで、玉鬘の詞。「故宮」は螢兵部卿宮。螢兵部卿宮が薨じて後、その北の方の真木柱のもとに紅梅大納言が通うようになり、やがて真木柱は紅梅大納言の今の北の方となった。螢兵部卿宮はかつて玉鬘に懸想した人でもあった。>とある。真木柱の再婚は此处にも語られている。しかも、紅梅巻での語り引いた立場で事情説明する姿勢に比べて、この玉鬘の弁は、実際にその経緯を見ていた者の生々しい証言みたいな臨場感がある言い方で、話が立体的に膨らむ。それと、「故宮亡せたまひて」は兵部卿職を匂宮が襲う時期に関係してくる。匂宮は薫君の1歳年上なので、この年で24歳の筈だ。匂宮巻一章一段に「御元服したまひては兵部卿と聞こゆ」とあって、匂宮の元服が12歳だとすれば、前兵部卿宮の逝去は12年以上前のこととなり、空席期間が少しあったとしても、このような名誉職が長期間放置されるとも思えず、せいぜい一年くらいと見做せば、前兵部卿宮はこの年から見て13年前の匂宮11歳の時に亡くなったことになり、それは匂宮巻が語られる4年前のことであり、光君の死が匂宮巻の2年前だとすると、前兵部卿宮は光君に先立って亡くなったことになる。仮定に仮定を重ねても親亀こけたら台無しなので、これくらいにして置くが、一応の参照考察ではある。 *「あはつけいやう」は「あはつけきやう」のイ音便。「あはつけき」は形容詞「あはつけし(軽々しい、軽薄だ)」の連体形。 *「さすがる方に」は<納得出来る部分があって=何はともあれ>だろうか。「目安し」は<安心できる=良好だ、結構だ>。

定めなの世や(無常の世だ)。*いづれにか寄るべき(何を頼れば良いのやら)」などのたまふ(などと玉鬘殿は仰います)。 *「いづれにか寄るべき」は注に<『集成』は「継子の真木柱の再婚生活の幸福、実子の御息所の苦労など、つい比較しての感慨」と注す。>とある。確かに、真木柱も冷泉院の御息所も同じ故殿の子ではあるだろうが、玉鬘の認識では恐らく真木柱は式部卿宮家の息女で、継子意識はあっても僅かだろう。むしろ、本当に誰が頼りになるか分からない、という実感なのではないか。藤殿だって昔は玉鬘に懸想文を遣した事があって、親しくなれる芽が無かったでもない。が、藤殿は実の弟血筋なので玉鬘は出自を隠していることを心苦しく思っていて、結局はその時の気まづさのまま、右家勢と左家勢に別れることになり、親身な関係には成らずじまいだったようだ。藤殿が真木柱に接近出来たのも、真木柱が式部卿宮家筋と成っていたからにも見える。

[第四段 宰相中将、玉鬘邸を訪問]

*左の大殿の宰相中将(左大臣家の子息の宰相中将が)、大饗のまたの日(右大臣家の大饗の翌日に)、夕つけてここに参りたまへり(夕方になって玉鬘邸に参上なさいました)。 *「ひだりのおほとこのさいしゃうのちゅうじゃう」は注に<夕霧の子、元の蔵人少将。薫と同時に昇進。>とある。この人は源左大臣家の出世頭ということで、他の人との混同を避けるために、少し本文からはズレるが<源参議>としてみよう。

御息所(姉姫の御息所が)、里におはすと思ふに(この実家にいらっしゃると思うと)、いとど*心げさう添ひて(とても芝居じみて)、 *「心化粧」は<相手によく思われようと改まった気持ちになること。>と大辞泉にあり、虚栄心から<見栄を張る>ようなことに思えるが、此处では同情を引くために<芝居っ気を出した>ような言動が下に語られている。何れ自己演出ではある。

「朝廷のかずまへたまふ喜びなどは(帝が公事にお認め下さった昇進の喜びなどは)、何ともおぼえはべらず(何もありません)。私の思ふことかなはぬ嘆きのみ(私事の失恋が)、年月に添へて(年追う毎にますます)、思うたまへはるけむ方なきこと(悲しく存じられて心の晴らしようがないのです)」

と(と言って源参議が)、涙おしのごふも(涙を押し拭うのも)、ことさらめいたり(わざとらしいのです)。*二十七、八のほどの(この人は27,8歳くらいで)、いと盛りに匂ひ(とても男盛りに艶っぽく)、はなやかなる容貌したまへり(華やかな顔立ちをしていらっしゃいました)。 *「二十七、八のほどの」はこの人の初めての年齢明示だ。どうして此处で明示されるのか。何で最初に言わないのか。怒りに近い驚きを持って、この記事を見た。薫君23歳、源参議28歳、と見ておこう。五歳年上だったのか。二章三段の記事などには同年か年下であるかのような印象もあったので、少し意外だった。これでやっと登場人物の項目に年齢も入れられる。

「見苦しの君たちの(見苦しい公達が)、世の中を心のままにおごりて(世の中を意のままに出来ると思って)、官位をば何とも思はず(昇進も有難がらず)、過ぐし*いますがらふや(暮らしていらっしゃることだ)。 *「いますがらふ」は動詞「いますがり(「居り」の尊敬語、いらっしゃる)」の未然形+継続の助動詞「ふ」の連体形、らしい。

故殿のおはせましかば(大臣殿がご存命なら)、ここなる人びとも(ウチの息子たちも)、かかるすさびごとにぞ(こんな色恋沙汰に)、心は乱らまし(浮かれていれただろくに)」とうち泣きたまふ(と玉鬘殿は内心で嘆きなさいます)。

右兵衛督、右大弁にて、皆非参議なるを、うれはしと思へり(自分の子供たちは長兄が左近中将から右兵衛督、次兄が右中弁から右大弁へと昇進したものの、皆非参議で政策決定に与れないのを嘆かわしく思って、)。 *注に<もと左中将は右兵衛督(従四位下相当官)に、またもと右中弁は右大弁(従四位上相当官)に、わずかずつ昇進、しかし参議にはなれない。かつての蔵人少将は宰相中将になり、四位侍従の薫は中納言に昇っている。『完訳』は「宰相中将が参議なのに、自分の子らが資格があっても参議になれないのを悲嘆」と注す。>とある。確かに、左様に補語した方が分かり易そうだ。で、この文だが、是は下に「皆非参議なるを」の「皆」の一人である末子の話が続くのだから、此处に句点を打つべきではなく、読点で下文に続けるべき

かと思う。「うれはしと思へり」の「思へり」は終止ではなく連用中止と読むべきだ。それに、敬語遣いでないところが、玉鬘の内心をそのまま示していて、下文は内心文括弧に校訂すべきと思う。

「*侍従と聞こゆめりしぞ(侍従と申し上げていたような末子は)、このころ、頭中将と聞こゆめる(この頃やっとな頭の中将となったようですが)。*年齢のほどは(年齢からすれば)、かたはならねど(順当な昇進であっても)、人に後る(同じ六条院の孫である源氏一族からは後れを取っている)」と嘆きたまへり(と悲しみなさいます)。*宰相は(参議職は)、とかくつきづきしく(とにかく貫禄が付きますからねえ)。*「侍従」は藤侍従。注には<頭中将はエリートコースのポスト、従四位下相当官。二人の兄に比較して日の当たる官職。推量の助動詞「めり」。語り手の婉曲的推量のニュアンス。>とある。しかし、「めり」の読み方だが、是は推量と言うよりは、傍観姿勢を作意した突き放したものの言い方で、「語り手の婉曲的推量のニュアンス」などではなく、玉鬘殿の心情に沿った視点での語り口なのであって、私は内心文括弧に校訂までしてしまったが、事実を敢えて遠目で言い表すことで、その事実を受け入れ難く遠避けたい気持や不満感を示しているのだろう。上文の「皆非参議なるを」の「皆」にこの末子が含まれているという文脈、というか構文として読むべき文だ。*「年齢のほど(としよはひのほど)」とあるが、年齢は明示されない。この人の年齢は未だに不明だ。ただ、次女が薫君と同じ23歳だとして、それより下だとすれば、21歳くらいなのだろうか。しかし、年齢差も触れられていないので、源参議のような見込み違いがあるかも知れず、やはり本文での明示が待たれる。と言っても、もう巻末で、少し苛立つ。*「宰相はとかくつきづきしく」は注に<宰相中将。『集成』は「玉鬘の姫君にかかわる貴公子として、薫よりはこの人を終始表面に立てた書き方」。『完訳』は「後続の物語があるような巻末形式である」と注す。>とある。が、与謝野訳文には<参議の職はいかにも若い高官らしく、ぐあいがいいのだけれど。>とある。話の流れ、文脈、特に語りとしての語感からすれば、「嘆きたまへり、宰相はとかくつきづきしく」が<(君たちが皆非参議なるを玉鬘殿は)嘆きなさいました、参議というものはとにかく貫禄が付くので>と聞こえるので、与謝野訳文に大意を従いたい。「宰相」が<源宰相中将という人物>を示す語で<参議職という地位>を示す語ではない、と言い切れる根拠が私には分からない。たとえ、作者が今までに「宰相は」という言い方で官位に付いて語ったことが、この物語では無かったとしても、そういう言い方自体は普通の語用だ。それとまた、「つきづきし」が分かり難い語で、大辞林には<ふさわしい。似つかわしい。好ましい。>とも<いかにももっともらしい。>ともあって、「とかくつきづきしく」が何を言っているのかが掴み難い。が、むしろ此処の文意から「つきづきし」の語意を探れば<劣って見えない→貫禄が付く>あたりになりそうで、語感としては<もっともらしい>に近似する。さらに、少し文法から詰めれば、「とかくつきづきしく」の「とかく」は<何しろ、とにかく>という事物の一般性向を言う副詞で、「つきづきしく」は形容詞「つきづきし」の連用形で下に<ありなむ>などが省かれた言い方だろうから、「宰相」を対象体とした叙述の言い差し、ではなく、「宰相」の一般性向を前述した判断の理由立てとして説明した女房言葉、なのだろう。

(2013年2月7日、読了)